

「文藝学校」講演会の記録（第1回～第15回）

【主催】 広島大学大学院文学研究科・NPO 法人「本の学校」

【共催】 株式会社今井書店グループ・「本の学校」郁文塾

第1回「文藝学校」講演会

日 時 平成15年10月4日（日） 午後1:30～4:30

10月5日（日） 午後1:30～4:30

場 所 本の学校 2階 多目的ホール（第1日）

島根県民会館 大会議場（第2日）

◎第1日

【演題1】 日本の詩歌

【講師】 位藤 邦生（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 日本の詩歌の長い伝統は、時の隔たりを超えて作品が共鳴しあう、独特の世界を作り出しました。近・現代の北見志保子・俵万智らの短歌作品と、古典作品との響き合いを確かめながら、詩歌の魅力を見直します。

【演題2】 シェイクスピア劇における女性たち

【講師】 中村 裕英（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 シェイクスピア劇には貞女・悪女・娼婦などさまざまな魅力的な女性が登場します。こうした女性たちの言葉や言動は当時の女性たちが置かれていた社会的状況と密接に関連しています。彼女たちの言葉のもっている魅力や洞察力を見ていきましょう。

【演題3】 サン＝テグジュペリ『星の王子さま』の世界

【講師】 松本 陽正（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 王子さまが狐から教わる「大切なこと」とは何なのか。テキストを分析しながらみていきます。また悲壮感すら漂っている作品の結末部の謎についても考えてみましょう。

◎第2日

【演題1】 稲村榮一著『訓注明月記』の面白さ

【講師】 位藤 邦生（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 稲村榮一先生が心血をそそいで完成された『訓注明月記』は、大変な労作であるばかりでなく、大変面白い本です。この稲村本『明月記』を例に引きながら『明月記』

の面白さを語ります。有名な「俊成終焉記」の記事を、時に冷泉家蔵定家自筆本と対照しながら読んでいきます。

【演題2】 シェイクスピアの悲劇的世界

【講師】 中村 裕英（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 シェイクスピアは『ハムレット』『オセロー』『リア王』『マクベス』という偉大な悲劇を書いています。それらの悲劇はそれぞれ独自の世界が探求されていますが、共通する問題もあります。自己の内面を深く掘り下げたこうした悲劇における世界観や人生観を主人公たちの言葉を手がかりに考えてみましょう。

【演題3】 カミュ『異邦人』を読み解く

【講師】 松本 陽正（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 「今日ママが死んだ」で始まる有名な冒頭部、どうしてあんなふうにそっけなく肉親の死を語れるのでしょうか？主人公ムルソーはやはり「変人」なのか？作者カミュは一体何を描き出そうとしたのか？そんな『異邦人』の謎を読み解いてみたいと思っています。

第2回「文藝学校」講演会

日 時 平成16年10月30日（土） 午後2:00～4:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】 近世和歌から明治短歌へ

【講師】 久保田 啓一（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 佐々木信綱や正岡子規が近世末期の大隈言通や橘曙覧を評価したのは有名ですが、彼らは近世においては全く無名の存在でした。私はあくまでも近世和歌は近世の価値観で評価した上で、明治和歌への展開を考えて行くべきであると考えます。近世和歌と明治和歌の相違点と共通点を、作品読解を通じて見て行きたいと思います。

【演題2】 英国の小説家 ディケンズの文学における語り

【講師】 植木 研介（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 19世紀のイギリスの小説は長編であることで知られていますが、今回は、彼としては短いクリスマス物の小説の語り方についてお話をし、彼の文学の魅力の一端を紹介します。「クリスマス・キャロル」と「炉辺のコオロギ」の出始めの部分と、あまり知られてはいないのですがとても愉快的クリスマス物語の枠組みの作り方を見て行きます。

第3回「文藝学校」講演会

日時 平成17年10月29日（土） 午後1:30~4:15

場所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】『トリスタンとイゾー物語』にみる愛のかたち

【講師】原野 昇（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】真夏の陽射しが照りつける船上で、誤って媚薬を飲んでしまったトリスタンとイゾー。二人はその後、「あなたなくしてわたしなく、わたしなくしてあなたなし」と愛し合う。この『トリスタンとイゾー物語』の源流をケルトの伝承にさぐり、フランス中世におけるその発展と変容をみていき、そのようなかたちの作品が待望され、受け入れられたフランス中世という時代の姿をみていきます。

【演題2】御伽草子の豊穡な世界

【講師】位藤 邦生（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】室町時代から江戸時代初期にかけて、多くの短編が作られました。それらの物語は「室町時代物語」とも「御伽草子」とも呼ばれ、内容的にも多彩な作品群です。『鉢かづき』や『物くさ太郎』、『一寸法師』、『浦島太郎』などのお話は、皆さんも子どものころお聞きになったことがおありでしょう。今回は『御伽草子』の魅力を、広島大学所蔵の貴重本の紹介とともに、語ってみたいと思います。

第4回「文藝学校」講演会

日時 平成18年10月14日（日） 午後2:00~5:00

場所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】ヨハン・シュトラウス作曲 オペレッタ『こうもり』

【講師】河原 俊雄（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】『こうもり』はウィーンの人々にずっと愛されてきました。今でも毎年大晦日には必ず上演されます。話は単純です。中年の銀行家が浮気をする。女房がその現場を押さえる。さて、どうなるのか。初めてオペレッタを見る方でも十分楽しめるように、ビデオを見ながらやさしく解説します。

【演題2】『源氏物語』の魅力

【講師】位藤 邦生（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】千年前に書かれた『源氏物語』が、今でも多くの読者の心を捉えて離しません。その魅力はどこにあるのでしょうか。今年は『源氏物語絵巻』の復元が話題を呼んで、また『源氏物語』への関心が高まっているようです。『源氏物語』第二部、特に「若菜

(上・下)」「柏木」の巻に注目して、『源氏物語』の魅力に迫ってみましょう。

第5回「文藝学校」講演会

日 時 平成19年10月7日(日) 午後1:30~4:40

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】イギリスのお墓のお話

【講師】吉中 孝志 (広島大学大学院文学研究科教授)

【要旨】私の趣味は、お墓めぐり。英国ルネサンスの文学とあわせてご案内いたします。

【演題2】おまけの話

【講師】位藤 邦生 (広島大学名誉教授)

【演題3】パリの映画事情

【講師】松本 陽正 (広島大学大学院文学研究科教授)

【要旨】フランス語で「第七芸術」とも言われている映画。現在のパリの映画事情をご紹介します。

第6回「文藝学校」講演会

日 時 平成20年月27日(土) 午後1:30~4:40

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】「源氏物語千年紀」とは何か?

【講師】妹尾 好信 (広島大学大学院文学研究科教授)

【要旨】今年2008年が「源氏物語千年紀」とされる理由とその意義について、主に『紫式部日記』を材料に考えます。

【演題2】ハックの旅の光と陰

【講師】田中 久男 (広島大学大学院文学研究科教授)

【要旨】マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年)が、なぜ今でも問題作として注目されるのでしょうか?

【演題3】お芝居の歴史と面白さ

【講師】松本 陽正 (広島大学大学院文学研究科教授)

【要旨】フランスにおける演劇の確立から戦後のヌーヴォー・テアトル(「新しい演劇」)

までの流れを分りやすく辿ってみます。

第7回「文藝学校」講演会

日 時 平成21年10月31日（土） 午後1:30～4:40

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】異質な文化を学ぶ意味

【講師】松本 陽正（広島大学文学研究科教授）

【要旨】フランス（人）と日本（人）とを比較しながら、異質な文化を学ぶ意味について考えてみます。

【演題2】酒と詩

【講師】狩野 充徳（広島大学文学研究科教授）

【要旨】古来「百薬の長」「忘憂物」と言われる酒。中国は陶淵明・李白・白楽天の酒の詩を読解し、鑑賞します。

【演題3】歌の力

【講師】位藤 邦生（広島大学名誉教授）

【要旨】それぞれの時代に歌は人々に大きな力を与えてきました。歌を作る人にも、歌を鑑賞する人にも、歌は、大きな勇気と慰めを与えました。短歌、長歌などのほか、歌謡も含めて考えてみます。

第8回「文藝学校」講演会

日 時 平成22年10月30日（土） 午後1:30～4:40

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】近代日本文学とフランス文学との違いについて

【講師】松本 陽正（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】漱石『こゝろ』、藤村『破戒』、スタンダール『赤と黒』、バルザック『ゴリオ爺さん』などを例にとり、近代における日本文学とフランス文学との違いについて考えてみます。

【演題2】「帰去来の辞」を読む

【講師】 富永 一登（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 古典文学の読解には、「今読む」という視点が大切です。隠逸詩人と称される陶淵明の「孤」の表現を通して、今に生きる中国古典文学について考えてみたいと思います。

【演題3】『讃岐典侍日記』あれこれ

【講師】 位藤 邦生（広島大学名誉教授）

【要旨】 『讃岐典侍日記』は11世紀初頭に書かれた日記です。小さな女流日記ですが、作者の気持ちが私たちの心にまっすぐに伝わってきます。時代背景などを説明しながら、日記本文を読みすすめてみましょう。

第9回「文藝学校」講演会

日 時 平成23年10月29日（土） 午後1:30～4:40

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】 フランス文学の名作を読む

【講師】 松本 陽正（広島大学大学院文学研究科教授）

【要旨】 レジスタンス（第2次大戦中のドイツ占領軍に対する抵抗運動）文学の金字塔ともいえるヴェルコール『海の沈黙』（岩波文庫）を分析し、あわせてフランスとドイツとの関係について考えてみます。

【演題2】 <文学の街>以前—今川了俊『道ゆきぶり』の「尾道」—

【講師】 藤川 功和（市立尾道大学芸術文化学部准教授）

【要旨】 今年は奇しくも林芙美子（1903～1951）の没後60年にあたります。その林芙美子の代表作『放浪記』や、志賀直哉の『暗夜行路』等の舞台となり、今や「文学の街」とも称される尾道ですが、近代以前の文学作品にも尾道はしばしば登場します。今回は、室町時代の武将にして歌人でもあった今川了俊（1326～1414頃？）の紀行文『道ゆきぶり』に描かれている「尾道」を読みたいと思います。

【演題3】 日本文学に育てられて

【講師】 位藤 邦生（広島大学名誉教授・福山大学教授・同人間文化学部長）

【要旨】 これまで私を育ててくれた日本文学作品の中から、『古事記』『源氏物語』と、いくつかの愛唱歌をとりあげて、その魅力についてお話しします。これらの作品には、私にとっての圧倒的な魅力と、一種の違和感が混在していて、いまだに離れられないのです。

「文藝学校」第10回記念講演会

日 時 平成24年10月27日(土) 午後1:30~5:00

10月28日(日) 午前10:00~午後1:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

◎第1日(主に社会人向け)

【演題1】漱石『こゝろ』の魅力

【講師】松本 陽正(広島大学文学研究科教授)

【要旨】文庫本の売上総部数第1位は、漱石『こゝろ』(1914)でしょう。なぜこんなに人気があるのでしょうか? その秘密を次のようなさまざまな角度から探ってみます。(1) 読みやすさ (2) 時代を先取りする試み: 匿名性など (3) テーマの普遍性 (4) 先生の〈こころ〉の緻密な分析とその手法の斬新さ (5) 日本人のメンタリティーに合致した作品世界 (6) 日本人好みのあいまいなタイトル。

【演題2】コルシカ島をご存知ですか?

【講師】J.G.サントニ(広島大学文学研究科教授)

【要旨】国籍の面では、コルシカ島の人フランス人ですが、あらゆる面でフランス人とは違います。また、フランス人と異なる文化を持っているのを誇りにしています。フランス本土から植民地化され、フランス人から差別的な視線を受けていると思っているプライドの高いコルシカ人は少なくないでしょう。ナポレオンを生み出したこの美しい島は問題児でありながら、特異な魅力をもった存在でもあります。その点について、お話しします。

【演題3】日本文学つまみぐい

【講師】位藤 邦生(広島大学名誉教授・福山大学教授)

【要旨】今年『古事記』が書かれて1,300年ということで、さまざまな書物が出版されています。また本屋大賞に三浦しおんさんの『舟を編む』が選ばれて、『古語大鑑』などの国語辞書が話題になっています。今年度は日本の代表的な文学作品をとりあげて、主に読解の要となる言葉について考えながら、文学の世界を楽しみましょう。

◎第2日(主に高校生向け)

【演題1】ことばの不思議

【講師】稲葉 治朗(広島大学文学研究科准教授)

【要旨】皆さんは英語など外国語の勉強で苦労したことはありませんか? なんでこんな言い方をするんだろう、こんなにたくさんの単語や熟語、覚えられないよ、などなど。でも、日本語を苦労して勉強している外国人も同じ思いをしているはずで、日本語ってなんて難しいんだろうと。そんな日本語を皆さんは意識的な学習もなく習得し、自由に

使いこなせています。ここではこうした言語の不思議に関して考えてみたいと思います。

【演題2】 空中神殿出雲大社と『古事記』神話

【講師】 妹尾 好信（広島大学文学研究科教授）

【要旨】 今年には日本最古の歴史書『古事記』が完成して1,300年目にあたるので、神話の故郷山陰地方でもさまざまな記念イベントが行われています。『古事記』を読むと、しばしば神話や伝説が実際の歴史とつながっていることが実感されます。たとえば、巨大な柱の跡が発見されて出雲大社がかつて高々とそびえ立つ高層建築であったことがわかったのは記憶に新しいですが、『古事記』の大国主神話にはその由来がちゃんと書かれているのです。

【演題3】 哲学 — 時代を凝視する思索

【講師】 山内 廣隆（広島大学文学研究科教授）

【要旨】 人文学は古い時代の文化だけを研究するだけの学問ではありません。人文学は「いまを善く生きる」ために過去を学ぶのです。だから文学部の眼はいつも「いま」を見続けています。講演では、現在のもっとも深刻な問題である「放射能災害」に焦点を当ててみます。そして、この問題を哲学的に考えるとどうなるか、展開してみます。皆さんも、この問題について予め考えてきませんか。

第11回「文藝学校」講演会

日 時 平成25年11月23日（土・祝） 午後1:30～5:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】 アメリカ文学とは何か

【講師】 大地 真介（広島大学文学研究科准教授）

【要旨】 アメリカの文化や社会の根幹をなす民主主義とピューリタニズム（キリスト教の一派）が、どのようにアメリカ文学に影響しているかということを、同文学を代表するハーマン・メルヴィルの『白鯨』、マーク・トウェインの『ハuckleベリー・フィンの冒険』、ヘンリー・ジェイムズの『鳩の翼』、ウィリアム・フォークナーの『八月の光』などを通してみていきます。

【演題2】 話すということ

【講師】 高永 茂（広島大学文学研究科教授）

【要旨】 「話す」という行為は「書く」と対比的にとらえられますが、その内実はずいぶん違ってきます。「話す」ことについて言語、副言語、非言語（ジェスチャー）という3つの観点から考察してみたいと思います。

【演題3】簾を上げた清少納言

【講師】妹尾 好信（広島大学文学研究科教授）

【要旨】中宮定子に「香炉峰の雪いかならむ」と問われた清少納言は、簾を高く上げて外の雪景色を見せます。『枕草子』の有名場面で、古来しばしば絵画化されてもいます。では、この時清少納言はどのように簾を上げたのでしょうか。典拠となった『白氏文集』や同じ話を載せる諸文献の記述、絵画の図像などを参考に考察してみます。

第12回「文藝学校」講演会

日 時 平成26年11月8日（土） 午後1:30～5:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】ロシア文学のなかの「日本人」

【講師】溝渕 園子（総合人間学講座・准教授）

【要旨】日本文化への国際的な関心についてニュースなどで報じられますが、かつて「外国」の目には、日本文化や日本人はどのように映っていたのでしょうか。20世紀ロシア文学にもさまざまな「日本人」が登場します。いくつか例を読み解きながら、その背景の一端を探っていきましょう。

【演題2】世界記憶遺産・道長自筆『御堂関白記』の和歌

【講師】妹尾 好信（日本・中国文学語学講座 教授）

【要旨】平安時代の最高権力者だった藤原道長の自筆日記『御堂関白記』が京都の陽明文庫に残っていて、昨年ユネスコの「世界記憶遺産」に登録されました。漢文で書かれた一見無味乾燥な日記ですが、実は8首の和歌が記されています。それらを読み解くことで道長の人柄にふれてみましょう。

【演題3】小説を読み解くワクワク感

【講師】松本 陽正（欧米文学語学・言語学講座 教授）

【要旨】20世紀文学を代表する名作、アルベール・カミュ『異邦人』（1942）を取りあげます。この小説は一人称で書かれていますが、一人称のナレーションによる効果を中心にお話しし、小説を読み解く面白さ、ワクワク感の一端をご紹介します。

第13回「文藝学校」講演会

日 時 平成27年7月19日(日) 午前10:30～午後5:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】多和田葉子——「言葉」は穴だらけ

【講師】小谷 裕香(今井書店吉成店勤務・広島大学大学院文学研究科 博士課程前期修了)

【要旨】「言葉」とは一体なんなのか。シンプルであるが故に難しいこの問題。本講演では、そんな「言葉」に常に向かい合い創作活動を行っている作家として、多和田葉子という人を取り上げます。時に翻弄され、時に置き去りにされ、それでもどこか惹かれてしまう彼女の小説の魅力についてご紹介できればと思います。

【演題2】三島由紀夫『金閣寺』と映画・演劇

【講師】有元 伸子(日本・中国文学語学講座 教授)

【要旨】今年三島由紀夫の生誕90年・没後45年の周年記念の年にあたります。三島の代表作で、戦後の日本文学をも代表する小説『金閣寺』(1956年)を取り上げ、文学作品が含みもつ多様な可能性を考えてみましょう。『金閣寺』は時事的な放火事件に題材をとった小説ですが、それが今日なお読まれつづけているのはなぜなのか、『金閣寺』を原作とする映画や舞台を紹介しながら探っていきたいと思います。

【演題3】『はらぺこあおむし』を英語で読む

【講師】今林 修(欧米文学語学・言語学講座 教授)

【要旨】この絵本は、1969年に出版されて以来、あおむしの可愛らしさと色彩の美しさに世界中の子どもたちのみならず、親たちまでも魅了されてきました。かくなる私もその一人でしたが、あることに目がとまった時から「絵」以上に「本」に興味をかきたてられました。あることとは、この絵本の中に出てくる英単語なのです。その一語から『はらぺこあおむし』を読み込んでみたいと思います。さあ、その単語は一体何でしょうか?

【演題4】奥書から古典を読む— 一定家筆『土佐日記』・『更級日記』の場合—

【講師】妹尾 好信(日本・中国文学語学講座 教授)

【要旨】普通、文学作品は本文(テキスト)を読んでその作品世界を楽しみます。しかし、古典作品にはもう一つの楽しみがあります。写本に添えられた奥書によって、その作品の伝来や書写の事情を知ることができるのです。古典には作者だけでなく、それを伝えた者の思いも詰まっていることがわかります。藤原定家が書写した『土佐日記』と『更級日記』の奥書を例にして、そのことを実感していただきたいと思います。

【演題5】サルトル「壁」— <実存>について考える

【講師】松本 陽正（欧米文学語学・言語学講座 教授）

【要旨】「サルトル」と言うと難解な印象を持たれるかもしれませんが、小説や戯曲といった文学作品はさほど難しくはありません。今回はサルトルの短編「壁」（新潮文庫『水いらず』所収）をご紹介しながら、「実存は本質に先立つ」という有名な言葉が、いかに巧みにイメージ化されているのかを見ていきます。あわせて、<実存>についても考えてみます。

第14回「文藝学校」講演会

日 時 平成28年7月18日（月・海の日） 午前10:30～午後4:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】米子のお寺が小説に—鳥取出身の国文学者・池田亀鑑—

【講師】小川 陽子（松江工業高等専門学校 講師）

【要旨】米子市福市にある安養寺は後醍醐天皇と関わりのあるお寺として有名ですが、この安養寺についての小説があることをご存じでしょうか。書いたのは池田亀鑑。鳥取県日南町の出身で、東京大学で国文学の研究と教育に携わった人です。今年はちょうど池田亀鑑の生誕120周年、没後60周年という節目の年にあたり、日南町では記念の展覧会も予定されています。今回は、安養寺のお話を読みつつ、池田亀鑑の人となりをご紹介しますと思います。

【演題2】『和泉式部日記』の不思議

【講師】妹尾 好信（日本・中国文学語学講座 教授）

【要旨】『和泉式部日記』は、女流歌人和泉式部が敦道親王との恋愛の経緯を記した日記とされています。仮名で書かれた日記文学としては、『土佐日記』『蜻蛉日記』に次いで古い作品です。でも、『和泉式部日記』は自己の体験を記した日記としては不思議なことだらけ。本当にこの作品は日記文学なのでしょうか。冒頭部分を読みながら考えてみます。

【演題3】英語の歴史は面白い

【講師】今林 修（欧米文学語学・言語学講座 教授）

【要旨】なぜ動詞 go の過去形は went なのでしょう。Be 動詞以外に、go-went-gone のように非常に不規則に変化する動詞をご存知ですか。

次に、下の英文の下線部に注目してください。

(a) I like him very much.

(b) I like him better than Tom.

(c) I like him (the) best of all the boys.

たしか、中学校で much の比較級は more、最上級は most と習ったはずなのに、なぜ(b)と(c)の文では、better と best になっているのでしょうか。

今回のお話しは、英語の歴史を辿りながら、上記のような中学校や高等学校で習った英語の不思議を分かりやすく解説したいと考えています。

【演題4】 ムラ社会は“悪”なのか?! - 「ムラの日本史」 = 中国との対比のなかで-

【講師】 勝部 真人 (歴史文化学講座 教授)

【要旨】 「ムラ社会」というと何かと悪いものの代名詞のように扱われます。しかし歴史学の世界では、現在全面的に肯定される傾向にあります。全否定でも全肯定でもない第三の評価はないのか、高校教科書の内容にも触れつつ、また中国の村と対比しながら少し考えてみたいと思います。

日本のムラは、世界的に見てもかなり大きな特色を持っています。それは現代の私たちの意識や行動にも影響を与えており、ムラが消えつつある今改めて考えてみる意義は大きいでしょう。

【受験相談会】

第15回「文藝学校」講演会

日 時 平成29年7月30日(日) 午前10:30~午後5:00

場 所 本の学校 2階 多目的ホール

【演題1】 あなたの知らない猫の世界 —猫と英文学、猫とヒトの時空間

【講師】 松本 舞 (欧米文学語学・言語学講座 助教)

【要旨】 月夜の晩、あなたが寝静まった後のひっそりとした時間、猫たちは何をしているのでしょうか？ そこには、ヒトが知らない、ヒトの世界とは全く別の猫の世界が繰り広げられています。

瞑想する猫、夢を見る猫、猫の名前あれこれ。小泉八雲、夏目漱石、T.S.エリオットなどの文学作品に描かれる猫たちの世界を見ながら、猫が作り出す時空間を見ていきたいと思います。

【演題2】 『ロミオとジュリエット』を一人で原文で読めるのか？

【講師】 今林 修 (欧米文学語学・言語学講座 教授)

【要旨】 シェイクスピアを原文で読むなんてとんでもない、なんて思っている方のために、どうしたらシェイクスピアの戯曲をお一人で読み進めることができるかについて、『ロミオとジュリエット』を取り上げながらお話ししたいと思います。特に、翻

訳ではなく、原文で読む「楽しさ」とか「喜び」を伝えることができましたら、たいへん嬉しく思います。

【演題3】「梓弓」の女の運命 — 『伊勢物語』に描かれた女性訓

【講師】 妹尾 好信（日本・中国文学語学講座 教授）

【要旨】 『伊勢物語』第24段は「梓弓」の段として知られ、高校の古文教科書にもよく採られています。都に働きに行った夫から3年間何の音信もなく、待ちくたびれた妻は熱心に言い寄ってくる男との再婚を決意します。ところが結婚の当日に夫が帰って来ました。事情を知って去っていく夫を追いかける途中、女は死んでしまいます。この悲しい話を私たちはどう読めばよいのでしょうか。『伊勢物語』の他の段ともあわせて考えてみます。

【演題4】 鳥取県出身の倫理学者・西晋一郎の思想から生き方を学んでみよう

【講師】 衛藤 吉則（応用哲学・古典学講座 教授）

【要旨】 今日、私たちの生活では、人と人、国と国との間で様々な不和が生じています。西晋一郎は、「異質な者が異質なまま、より善く共存できる」思想の道筋を私たちに描いてくれています。そのためには、どうも、「自己や他者への気づき」を深めることが大切なようです。ご一緒に考えてみましょう。

【受験相談会】